

# 福井市多文化共生推進プラン (第3次)

【資料】



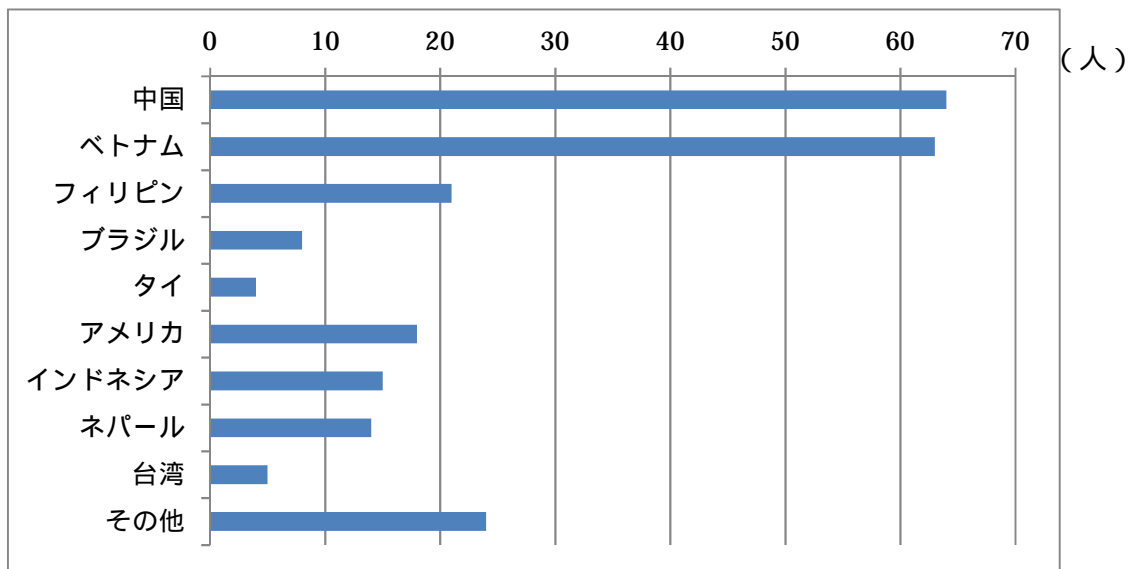
## アンケート集計結果

目的	福井市多文化共生推進プラン改定に係る外国人からの意見収集
対象者	福井市に居住または通勤している外国人市民
実施方法	日本語版（ふりがな有）中国語版、英語版、ポルトガル語版、ベトナム語版のアンケートを作成し、6月8日に開催したグローバルフェスタに参加した外国人に対し、調査を行った。また技能実習生受入企業や日本語教室等に配布して調査した。
回収数	251件
実施期間	令和元年6月8日～10月20日

### アンケート結果について

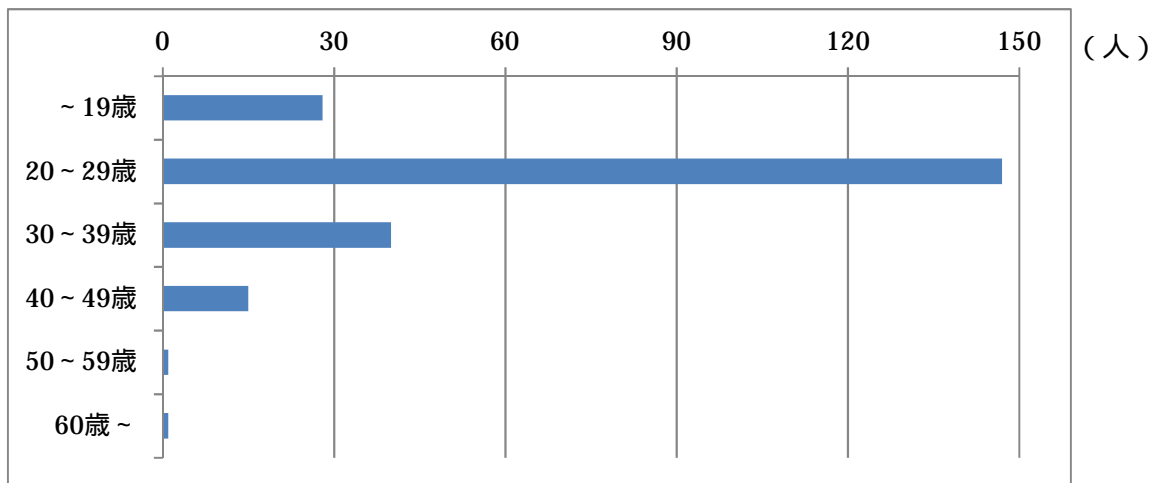
#### [ ]対象者の属性

##### 1. 国籍について

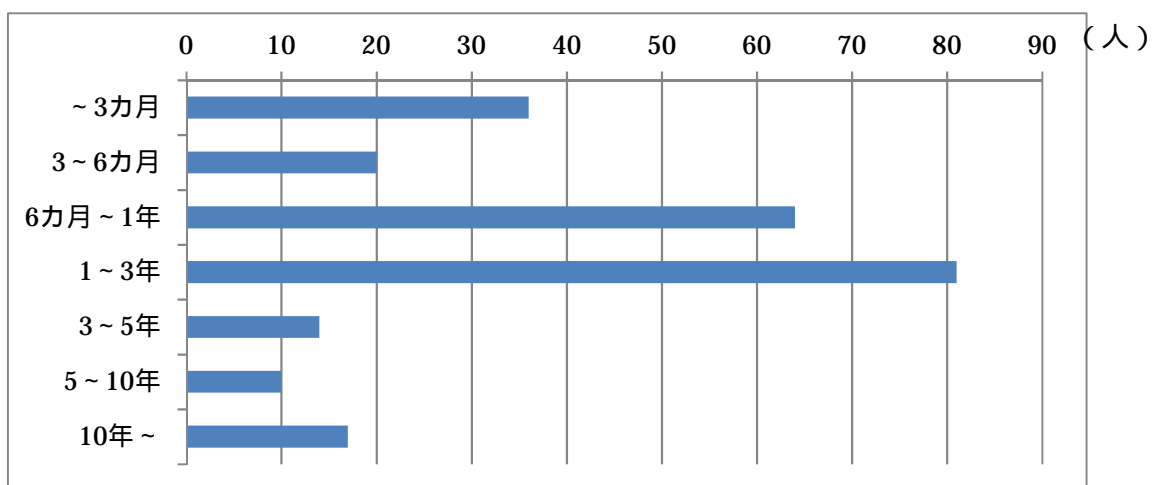


「その他」には、インド、スリランカ、ロシア、ニュージーランド、ウズベキスタン、イタリア、バングラデシュ、ミャンマー、グアテマラ、オーストラリア、メキシコ、カンボジア、カナダ、イギリスがあった。

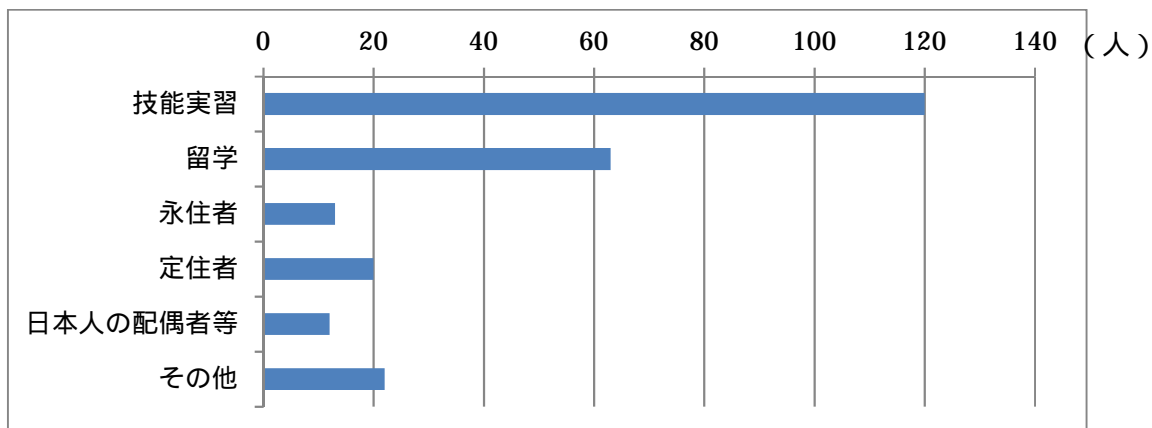
## 2. 年齢について



## 3. 来日してからの期間

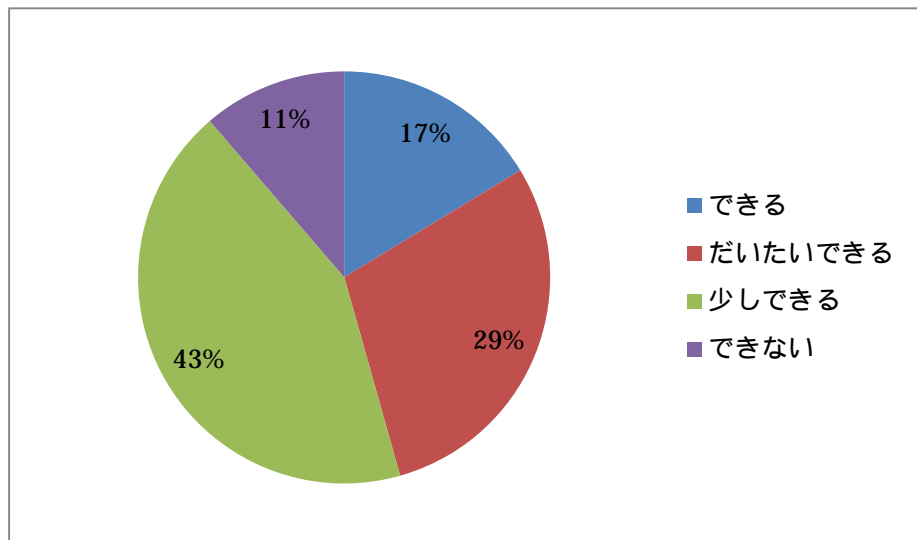


## 4. 在留資格について

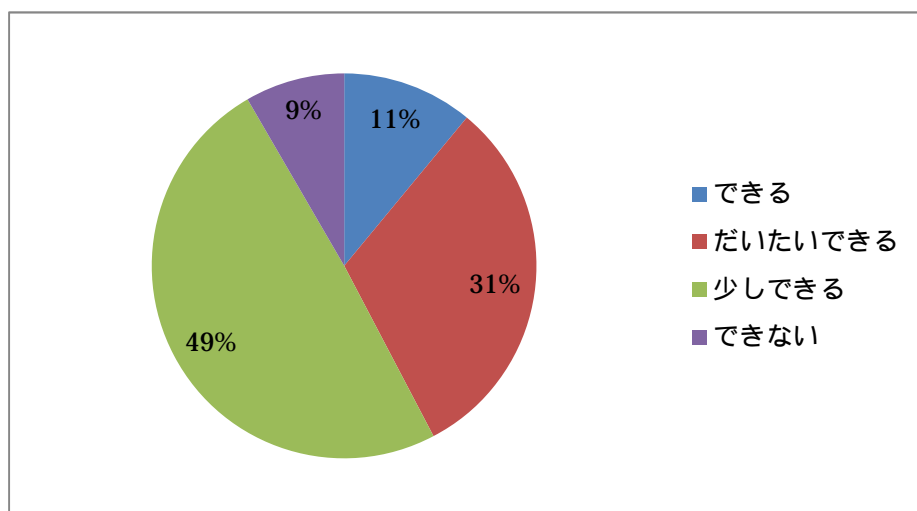


## [ ] 日本語能力について

### 会話



### 読み書き



技能実習生については、来日前に日本語学習をしており、留学生も少なからず日本語を学んでいるため、いずれも日本語での簡単な会話は可能と思われる。

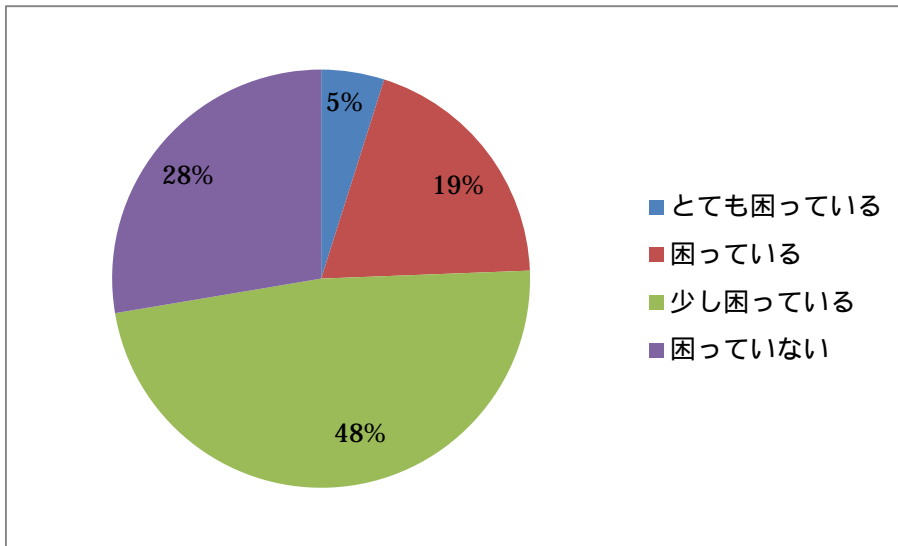
ただ、会話、読み書きともに、「少しできる」「できない」と回答している人が半数以上いる。自由記載には、会話や漢字が難しい、日本語が聞き取りにくい、日本人との日本語での交流が困難である等、日本語に関する困難が多く書かれていた。

日本人側の工夫として、漢字にはルビをふる、簡単な言葉を使う、ゆっくり話すということに心がけることで改善する余地はあるものと考えられる。

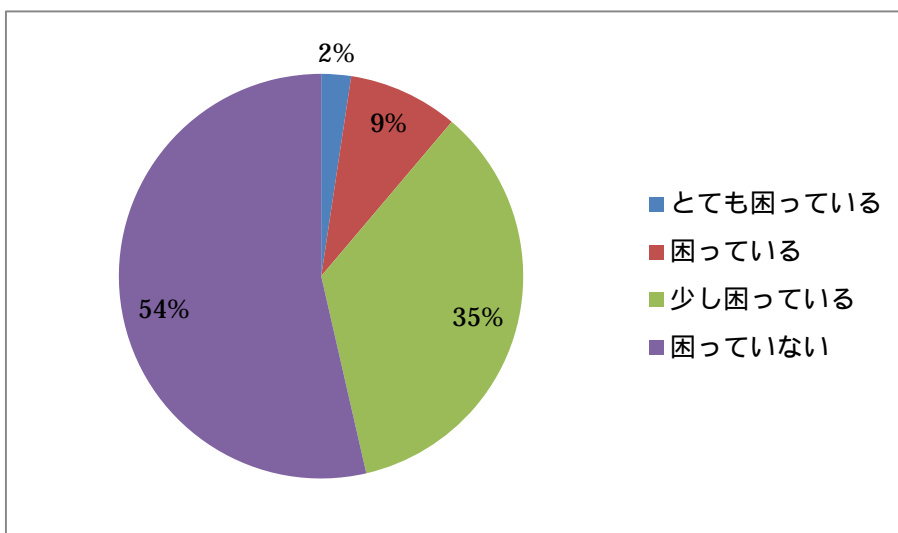
## [ ] 各分野の質問

(自由記載を分野ごとに整理して記載しています)

### 1. 日本語を学習すること

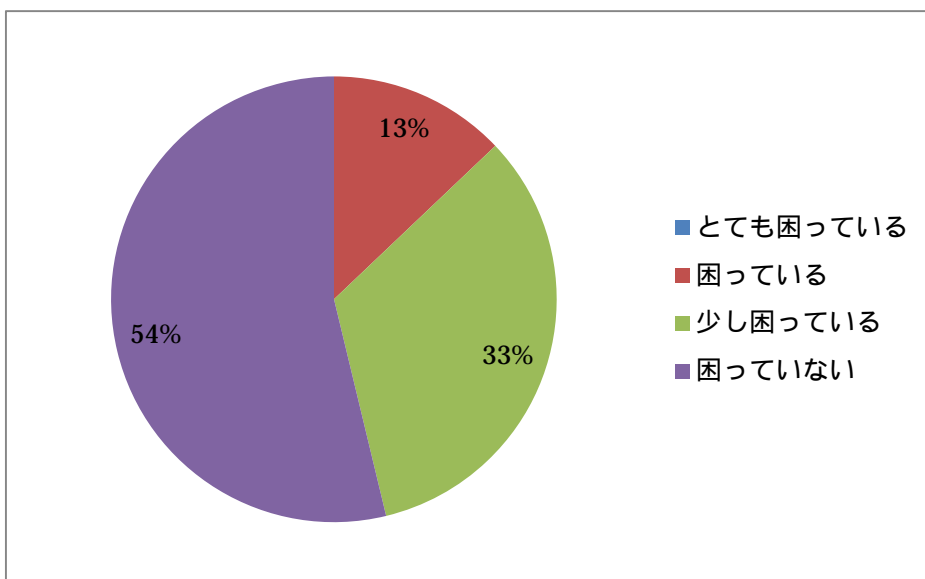


### 2. 仕事

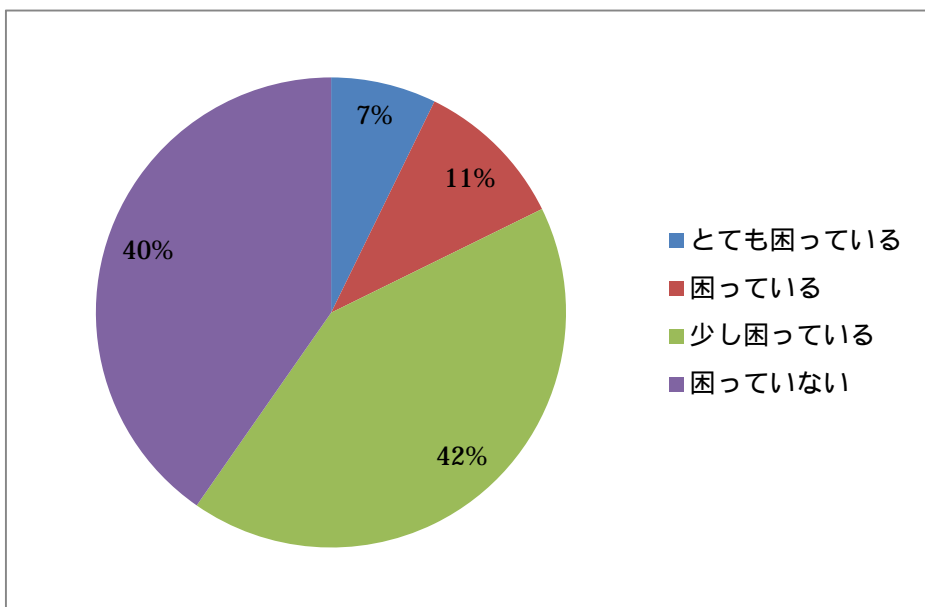


仕事をする上で日本語がわからない、上下関係がわからない、仕事を得るために日本語能力試験に合格する必要があるという記載があった。

### 3. 学校の勉強（大学、日本語教室等）



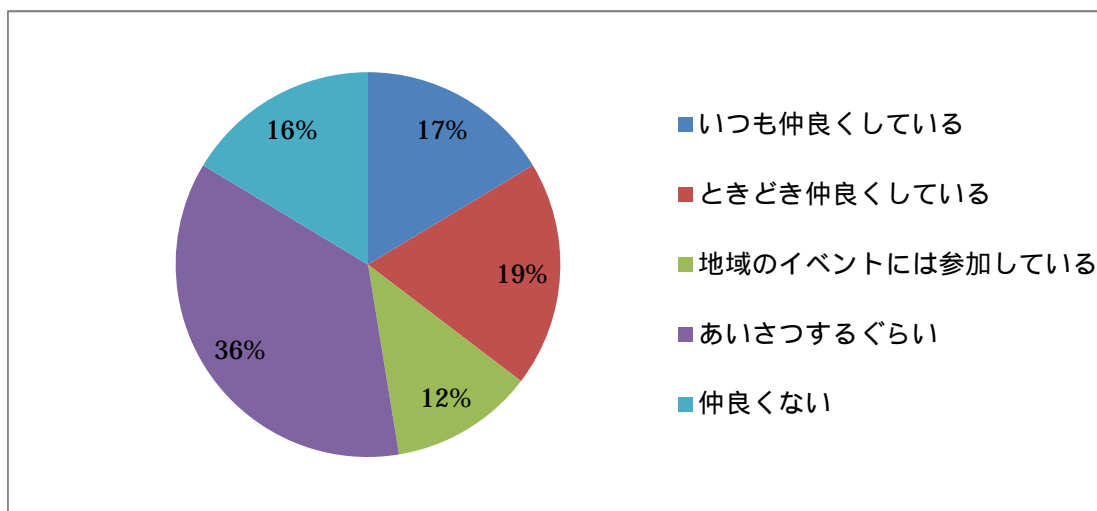
### 4. 地域との関わり



日本人の友達を作ったり、深い友好関係を維持したりするのが難しい、子どもが日本語ができないから、学校で同級生との交流に困難があるという記載があった。

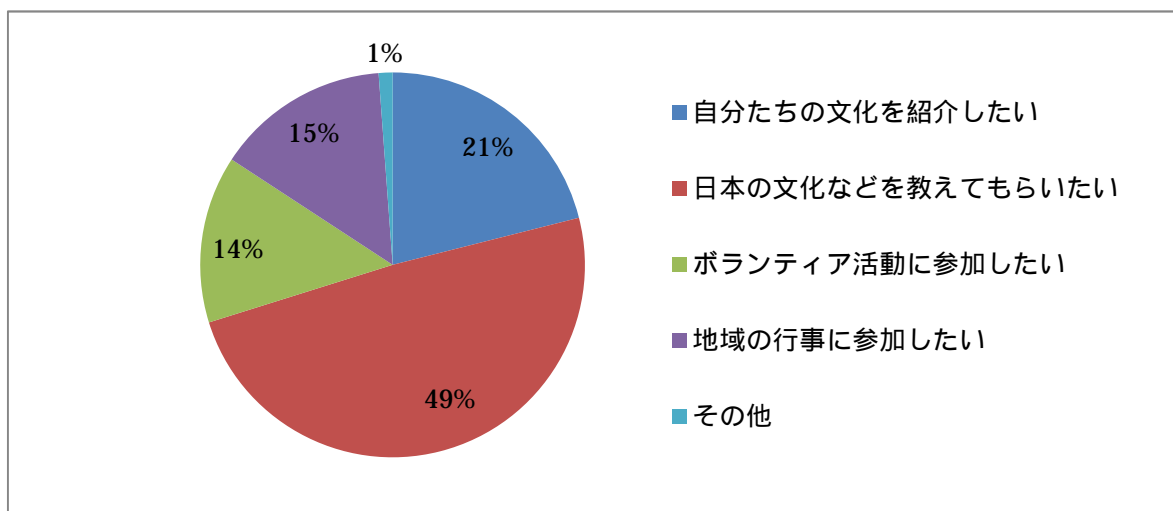
地域との関わりについては、具体的に以下のような結果となっている。

あなたは住んでいる地域の日本人と仲良くしていますか？



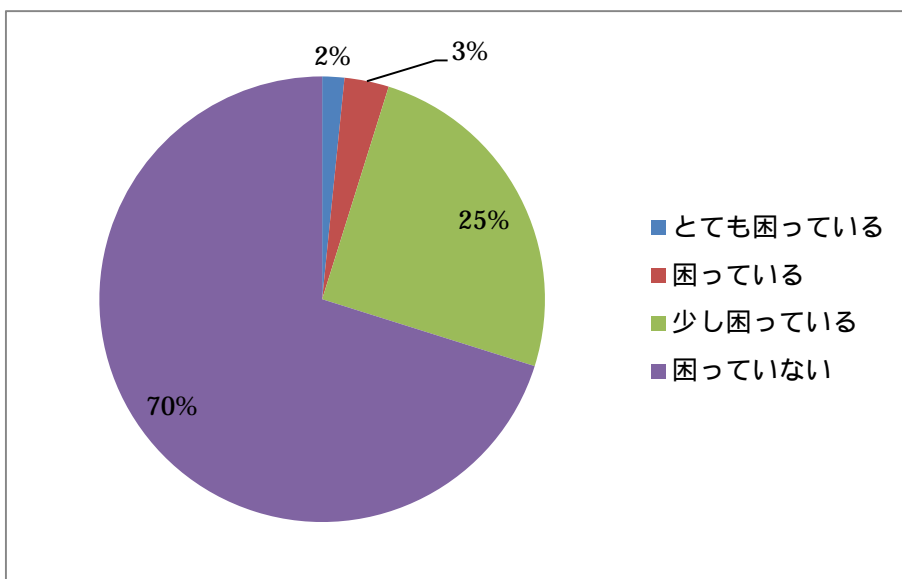
アンケート時の聞き取りでは、仲良くない原因として、言葉の問題から話しかけにくい、きっかけがない等の話があった。同国の人からいろいろ教えてもらうことで、ある程度、日常生活ができてしまっていることも原因と考えられる。

地域でどのような交流をしたいと思いますか



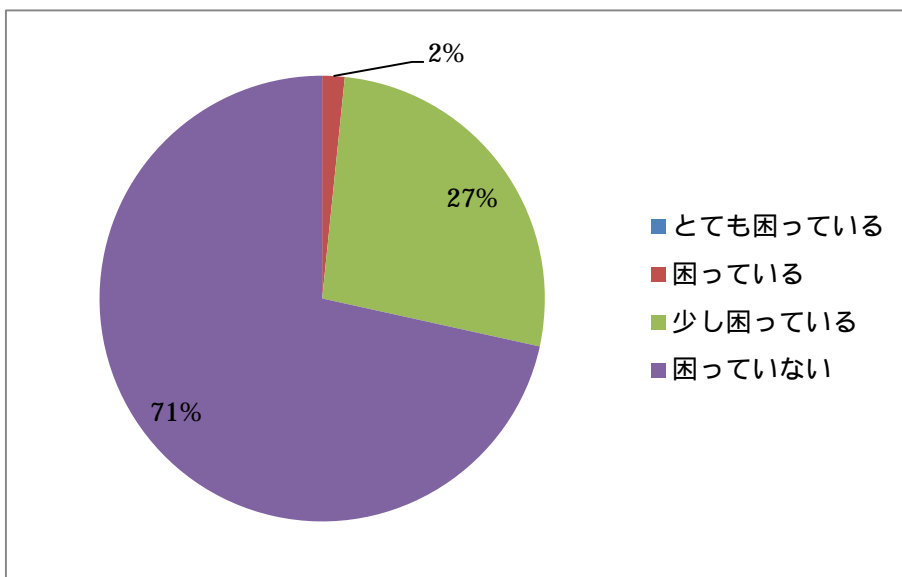
地域との交流では、「日本の文化などを教えてほしい」という回答が最も多く、日本文化を通じた交流活動が望ましいと考えられる。

## 5. 買い物や食べ物



「困っていない」という回答が多数を占めているが、買い物をする時日本語のみの表示が多くて困ったという記載も複数あった。また、イスラム教徒に対応したハラルの食べ物を見つけるのが難しいという記載もあり、今後店舗等での表示の工夫が必要と考えられる。

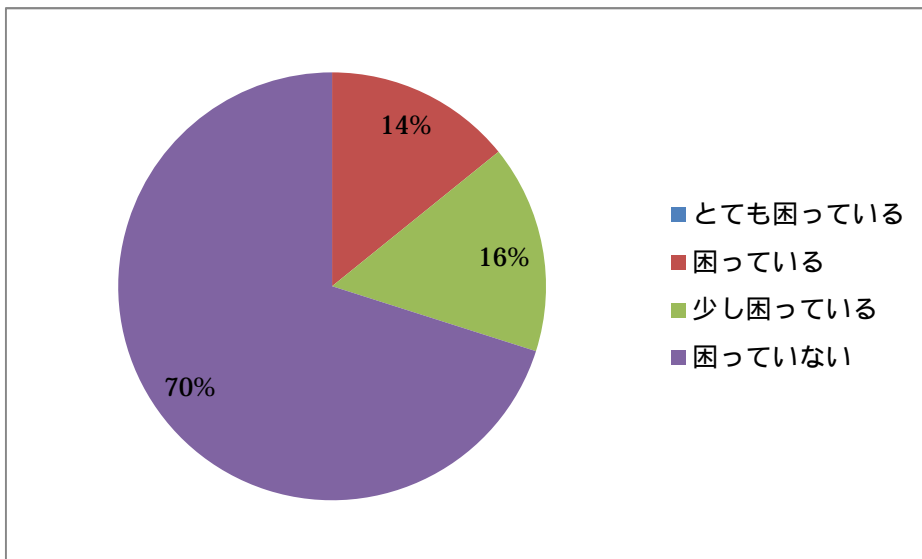
## 6. ごみの出し方



「とても困っている」「困っている」と回答している人が他の項目より少ない。ごみ分別については、アンケート時の聞き取りの中で、ほとんどの人が「知っている」と答えていた。



## 7. 交通のルール

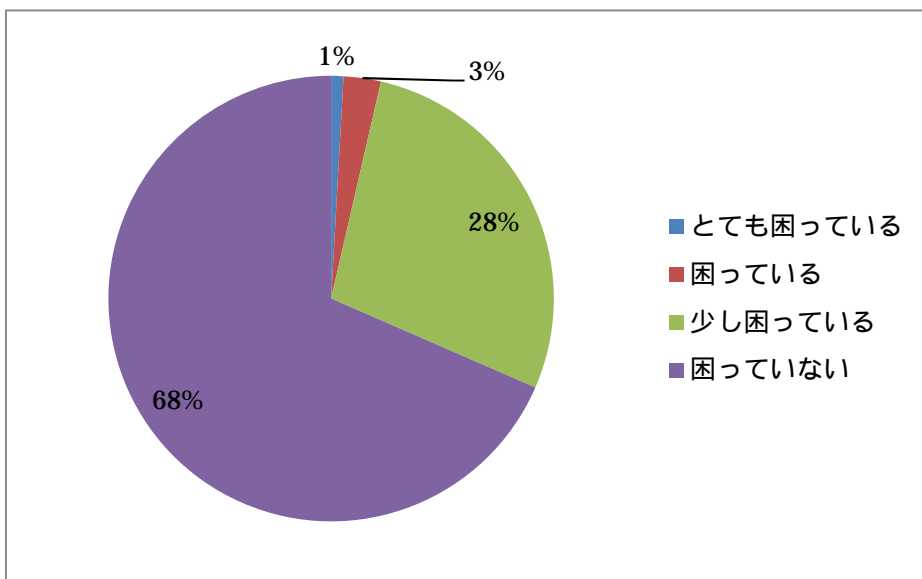


非常に困っているという状況ではないものの、自由記載には多数の意見があった。

交通機関が少ないという、交通機関の不便さについてや、バスの乗り方がわからないなど交通機関の利用方法についての記載があった。また、技能実習生や留学生の移動手段として重要な自転車についても、自転車専用の道が足りない、自転車が壊れたときに対応ができないという記載があった。

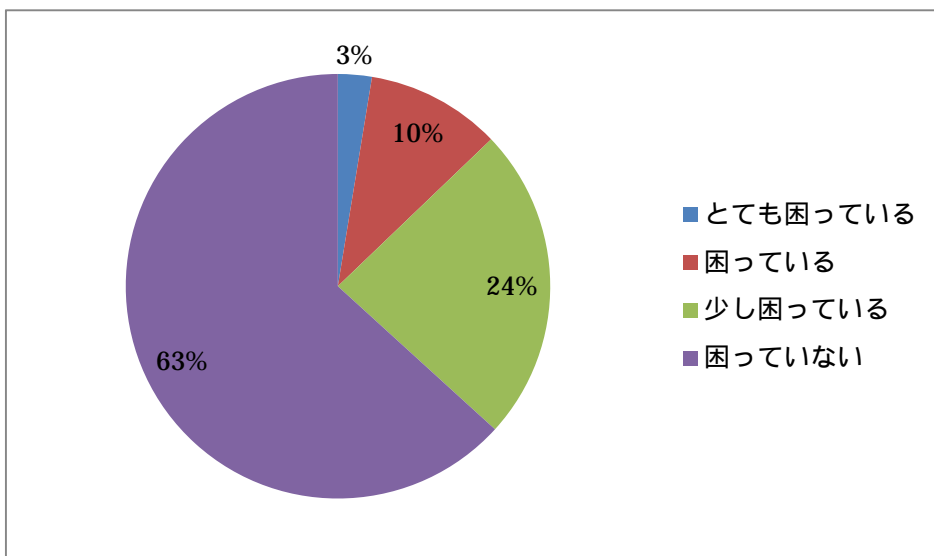
交通については、自転車を含め、外国人への情報提供について検討の必要があると考える。

## 8. 社会のルール



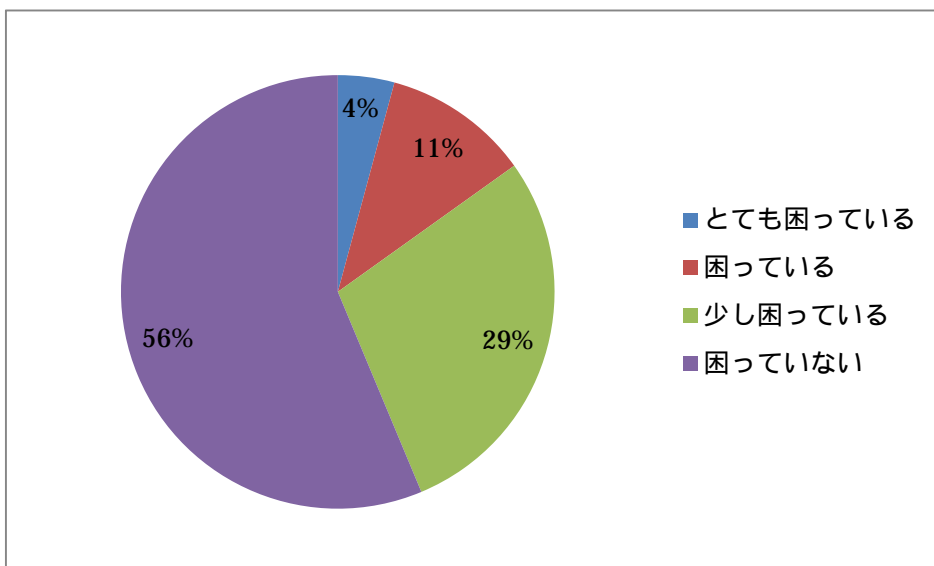
運転免許を取得するのが難しいという記載があった。

## 9 . 自然災害（地震・台風など）、火事、事故などの情報を知る方法



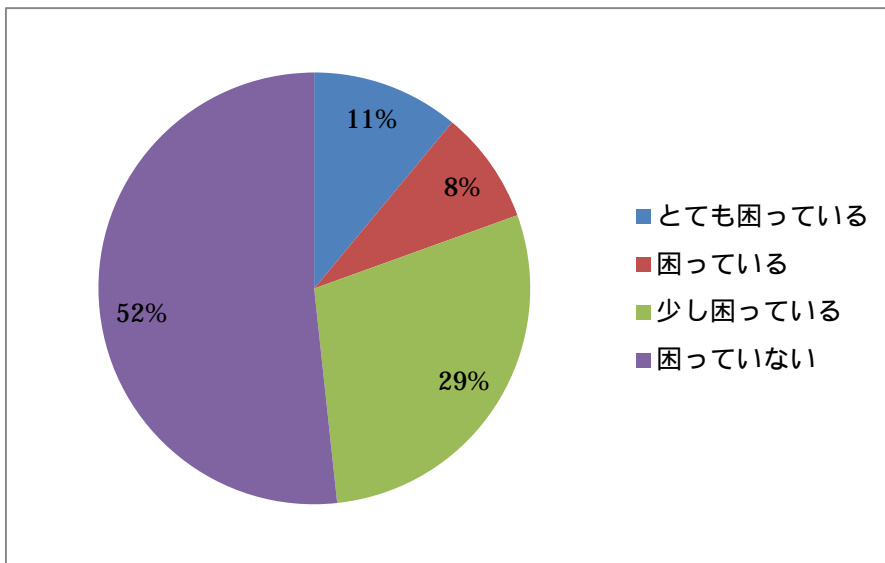
「困っていない」という回答が多数を占めているが、アンケート時の聞き取りの中では、エリアメール等を知らない人が多かった。アンケート調査と併せて、観光庁が発行している「Safety Information Card」等の情報提供も同時に行った。継続的な取組が重要と考えられる。

## 10 . 災害のための備えについて



アンケート後には、「普段から災害に備えましょう」というチラシを配布した。アンケート時の聞き取りの中では、「備えがあるか」という問いに「ある」と答えたのは37%だった。

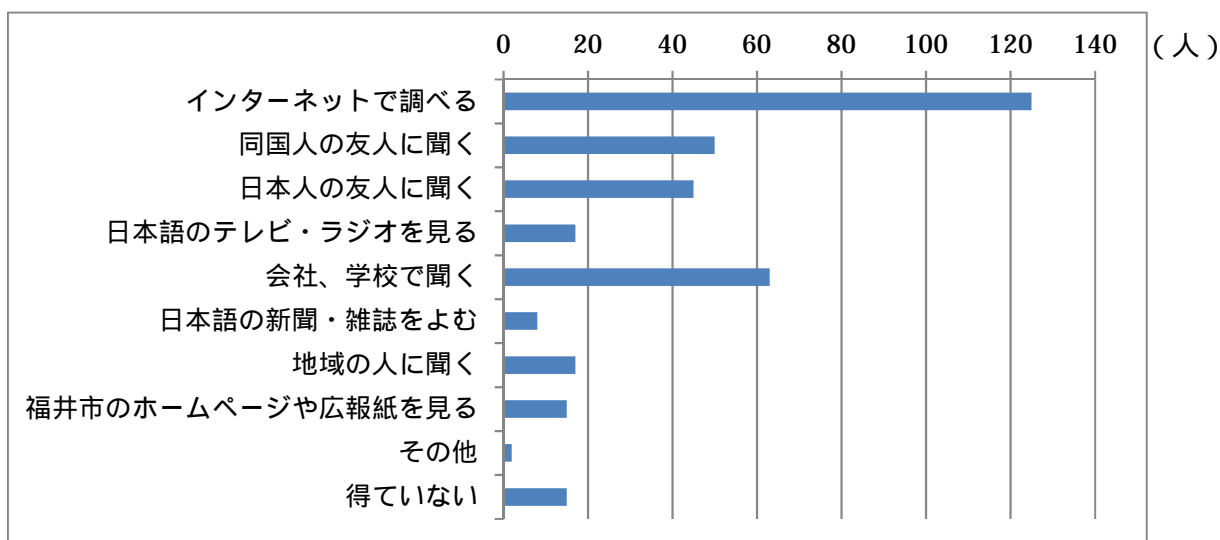
11. 手続き（在留期間の更新、携帯電話の契約、部屋の賃借など・・・）



他の項目に比べ、「とても困っている」の割合が高い。引っ越しの手続きが外国人には難しい、国民健康保険に関する相談ができない、銀行の情報が多言語でほしいという記載もあり、各種手続きの多言語による情報提供や支援が必要と考えられる。

## [ ] 情報収集の方法について

困ったとき、どうしますか？



インターネットでの情報収集が多数を占めている。アンケート時の聞き取りの中では、インターネット検索は母国語で行うことが多いとの話もあった。多言語化した情報提供や、会社や学校を通じた情報提供が効果的であると考えられる。

## 聞き取り調査結果

目 的	福井市多文化共生推進プラン改定に伴い、外国につながる子どもや保護者との関わりがある保育や学校教育現場における意見収集
対 象 者	保育園等に勤める保育士等、小中学校に勤める教職員等、日本語指導ボランティア
実施期間	令和元年 7 月 30 日～8 月 20 日

### 子どもについて

#### 【就学前】

- ・多くの場合、入園してすぐに上手に馴染める。ただ、文化の違いから、入園当初から馴染めずに時間がかかることもある。園では、親や兄弟と一緒に園で過ごす時間を増やすなど柔軟な受入れをしたが、結局馴染むことができなかった子もいた。
- ・「食べられるおやつが限定されている」、「歌ったり踊ったりできない」、「写真が撮影できない」などの宗教上の制限がある子どもの対応に戸惑った。

#### 【小学校】

- ・幼少期から日本にいる場合には、小学校入学前までに日本語が話せることが望ましい。話せないと、音と文字の結びつきでつまづく。
- ・外国につながる児童（外国籍児童だけではなく、父親や母親のどちらかが外国籍の場合等日本語を母国語としない児童）の多くは、学校では日本語、家庭では違う言語を話すため、日本語が定着せず、学習や友達とのコミュニケーションに支障をきたし、サポートが必要となる場合がある。また、日常生活で日本語ができて、学習内容が理解できるわけではない。
- ・日本語指導<sup>1</sup>の取り出し授業<sup>2</sup>の比率が難しい。日本語初期指導の回数は原則として40回だが、十分に日本語の習得ができていない場合がある。
- ・日本語指導は、児童の性格に左右される部分も多い。負けん気が強い子は結構習得が早い。失敗を恐れる子等は、習得が進まない傾向がある。
- ・保護者の方針、家庭での協力体制など、保護者の力は大きい。学習に対して、教師と保護者が十分な共通理解をもつことで、保護者の子どもに対する関わり方が変わり、子どもの学習意欲を高めることができる。ただし、日本語能力が十分でない保護者や、仕事の都合で教師と十分なコミュニケーションがとれない保護者もあり、日本の教育につい

<sup>1</sup> 日本語指導：外国人児童生徒や帰国児童生徒への有償ボランティアによる日本語初期指導。福井市学校教育課がふくい市民国際交流協会に委託している外国人児童生徒サポート事業の一部。

<sup>2</sup> 取り出し授業：学校の授業時間帯で1～2時間程度、別室で個別に行う指導。

て理解をしてもらうことは簡単ではない。

- ・通常、教師、日本語指導ボランティア、児童の三者で相談して日本語指導を開始するが、それに保護者も含めて話をする機会があるといい。
- ・高学年から日本に来た児童は、保護者と離れたくないという一方でなぜ日本にいるのかという思いが強く、やりきれない思いを抱えていて、勉強どころではない。うまく馴染めないと、半年程度で母国へ戻るという場合もある。
- ・長期休暇中だけでなく、突然帰国することがある。2カ月や、長い場合では1年間もの間帰国しているケースもあり、日本に戻ってくる時期についても明確でない場合が多い。時には、学校にしっかりと連絡をせずに帰国をしてしまうケースもある。また戻ってきた時には、児童は日本語を忘れていて、勉強し直しということもある。
- ・学習面の遅れが、今後高校にいけない、働けない、生活していけないという連鎖につながる可能性があると思われる。外国につながる児童が将来的に日本で生活をしていくことを考えると、生活も勉強もサポートする必要がある。

#### 【中学校】

- ・外国につながる生徒は増えている。生徒が日本語を話せても、日本語が話せない保護者がいる。ただ中学生になると、保護者にうまく伝わらない場合でも、生徒に伝えれば必要なことは保護者に伝えてくれる場合もある。
- ・小学校の時に十分な日本語（読み書き）を身につけていないと、能力はあっても中学校の授業にうまくついていけない場合が多い。
- ・保護者が母国へ帰っていたり、時間帯が不規則な仕事で、生徒が1人で家にいたりすることもある。
- ・日本語ができないから、高校にいけない、働けない、生活していけないという連鎖に陥らないようになるとよい。

保護者について

#### 【就学前】

- ・園が入園の面接の場所を伝えるのが難しい。園がどこにあるのかわからず、市役所に相談に行くこともある。車を所有していない保護者もあり、道案内や説明も難しい。
- ・入園時の説明が何より大変である。入園のしおりをローマ字で書いたり、図式化、絵、写真等で説明したりして、何とか対応している。入園関係の書類についても複雑で、勤務形態によって提出書類の内容が異なるため、いろいろなサポートがあるといい。勤務証明書の提出について、外国からの仕事を請け負っているということから、非常に手間取ったケースもある。
- ・入園した当初は、子どもはみんな不安定であるが、「慣れていくよ」とか「心配しなくてもいいよ」など、微妙なニュアンスを伝えることが難しい。

- ・両親のどちらかが日本人であれば、お知らせや連絡帳、書類提出等についても、意思疎通が図りやすい。しかし、両親ともに外国籍の場合には、特別な対応が必要である。一方で外国籍の保護者でも、別の保護者からおたよりの説明を聞くなど、保護者同士のネットワークの中でサポートを受けている場合もある。また、まったく日本語を理解できない保護者については、保育士が翻訳アプリを使ってやりとりをする事例もある。
- ・健康状態や離乳食の聞き取りについては難しい。離乳食は、家で食べたことがあるものしか提供できないため、聞き取りが重要で、写真入りの食材の本を見せながら、確認することもある。連絡帳のやり取りは、ローマ字で記入したり、熱、顔色、機嫌の3つの項目については、表情のマークでわかるようにしてやり取りしている例もある。
- ・提出書類については、印鑑等記入に必要なものを保育園に持ってきてもらい、確認しながら保育士が代筆することもある。
- ・お知らせについても、ルビをふるとか、ひらがなにするとか、特定の人専用の通知を作成する場合がある。重要な事項についての通訳、園だよりや給食だよりの翻訳などをしてもらえると良い。
- ・国によっては、感染症に関する認識が日本人とは多少異なっているようである。そのため、感染症と考えられる場合はよく説明し、迎えに来てもらっている。

#### 【小学校】

- ・遠足でお弁当が必要な時など特別な準備が必要な場合は、前日に児童によく説明したり、保護者にも電話連絡をしたりなど、幾重にも対策をしている。
- ・日本語の理解度が低い保護者への連絡については、何度も電話をすることもある。「ハイハイ」と答えてくれても、理解できていないケースも多い。
- ・小学校高学年になると、保護者よりも児童のほうが日本語ができるようになるので、児童によく説明すればたいいことはうまく伝わるが、低学年の場合は難しい。特に入学、保健関係の書類などについては児童もその重要性を理解できないため伝えきれず、提出してもらえないことが多い。そのような場合、電話で印鑑や通帳を含め、すべての書類を持って学校に来てもらい、こと細かに説明しながら記入してもらうため、1件1件にとっても時間がかかる。
- ・生活保護、就学援助などの手続きを促す場合、所得の申告や、必要書類の取得も含めて学校がサポートするのは大変である。
- ・シングルマザーであるために、昼も夜も働き、夜は子どもだけになるという家もある。このような場合、母親と電話がつながらず、連絡がとれないこともある。
- ・緊急メールについて、学校からメールがあったということで学校に電話をかけてくる保護者、メールの登録の仕方が分からないため緊急メールに登録していない保護者、または、メールが届いても書いてある内容が理解できず、放置している保護者もいる。
- ・保護者自身が日本語を話せなくても、勤務先から学校に問い合わせをしてもらっている

保護者もいる。会社でもサポートしてもらえることが望ましい。

- ・文化が違うことから行き違いが生じることがある。時間にルーズであったり、家族の誰かが病気になると家族みんなで病院に行くことを優先したりと、子どもは毎日学校に行かなければならないという意識は日本人と比較すると弱い。
- ・学校集金の支払いは理解できているが、計画的にお金を使うことができず、口座の残高不足により引き落としができないケースも少なくない。何度も説明するという対応しかできない。
- ・同じ母国語のコミュニティの中でいろいろな問題が完結してしまうことがある。その結果、子どもの障がいを見過ごす場合がある。小さいうちから国籍にかかわらず集い、相談できる場所があることが望ましい。
- ・通院している児童について、主治医と保護者との意思疎通が不十分なため、毎回教師が同行しているケースがある。教師が診察を予約したり、診察日時の確認をしたりすることもある。病院から学校に予約の確認の電話が来ることもある。病院と学校が連携してサポートしている。主治医からも、学校の様子を知りたいという要望がある。
- ・保護者懇談会について、保護者と日本語でのやりとりが困難なためサポートが必要だと感じる場面もあるが、実際に通訳ボランティア派遣を依頼しているのはその一部のみである。懇談は片言の日本語で行っており、表情を見て、伝わっているかどうかを判断している。
- ・学校をはじめとする周囲の手厚いサポートのため、保護者は意外と困っていないように思われる。「母国の先生はこんなことまでしてくれない、ありがとう。」と学校や教師が感謝されることもある。

#### 【中学校】

- ・保護者のしつけ、人間関係のあり方、先輩・後輩のとらえ方など、国によって文化の違い、物事の考え方の違いがある。保護者の教育についての考え方も日本とは異なり、平日であっても、親の帰国に同行させ長期に渡り学校を休ませることもある。
- ・提出を要する書類を作成する上での問題が多い。保護者に学校に来てもらい、確認しながら担任や職員が代筆し、書類を作成することもある。
- ・生活保護、就学援助、特別就学奨励費、災害共済給付等については、きめ細やかな説明が必要である。必要な情報が正確に伝わるように提出書類の多言語化等の対応が必要である。
- ・保護者懇談会などでは、保護者とは簡単にコミュニケーションをとるものの、どこまで理解してもらえているか不安がある。